

平尾が寢室のドアを開け、電灯のスイッチを入れた。

今朝起きたままで、皺になっっているシングルベッドと、デジタル式の時計が乗っているナイトテーブル。それだけが置かれている寢室の壁には、大きな姿見が一枚掛けられている。

「ねえ、先生……」

平尾に寄り添っている薫が、ボディストッキングに包まれた体をすり寄せてくる。

「分かってるって——」

「あん！」

平尾が薫を抱きかかえてベッドに放りあげ、続けて自分も皺になったシートの上であぐらをかく。

「ほら、やってみな」

「うん……」

薫が屈みこんで平尾の股間に顔を寄せる。バスローブをめくり、半ば勃起している淫茎を取り出した。

「先生のもいっぱい濡れちゃってる……」

淫茎を両手で支えて持ち、唇を開く。舌が、亀頭を濡らす男の先走りの粘液を拭い取りはじめた。

「ちゃんと全部舐めて、綺麗にするんだぞ」

「はい……」

自分に奉仕する薫の姿と、亀頭を這うかすかにザラついた舌の味わいによって、すぐに淫茎は張り詰め、細い指のあいだで脈打つ熱く固い肉塊となる。

「凄……」

薫が顔を進め、淫茎を啜えこむ。

「んっ……んんっ、はあ……おつきい……んんっ……お口がいっぱいになっちゃう……」

顔を上下に振り、窄めた唇で肉竿をこすりながら、薫は黒い網目に包まれた尻を振り、太股をこすり合わせている。

「ほら、鏡をしてみるよ、美味そうにしゃぶってるぞ」

「……ぞ」

薫がベッドのすぐ横の壁に掛けられた鏡に振り返る。そこに見たものは、頬を染め、瞳に淫ら

な光を浮かべて淫茎を舐めしゃぶっている自分の姿だった。

「わたし……凄くエッチな顔してる……」

顔をあげ、鏡を見つめながら、握った平尾のモノに頬をすり寄せて、長く伸ばした舌で淫茎を下から上へと何度も舐めまわす。

「ほら、唇も使ってみな」

「うん……」

薫が横目で鏡を見ながら亀頭を啜えこむ。唇が敏感な粘膜をこすり、舌が先端をチロチロとくすぐる。

頬が窪み、平尾が亀頭を吸われる快感にくぐもったうめきを漏らすと、薫が顔をあげた。

「こんなのって好き……エッチなこと大好き……」

「そうか。よし、じゃあ、ほら次だ」

平尾が薫を抱きあげ、背中を自分に向けさせた恰好で、あぐらを組んだ脚の上に乗せた。

「自分で入れてみな」

「うん、いいよ……」

薫が、平尾の脚を跨いでM字形に開いた太股を立て腰を浮かす。

黒いストッキングを張りつけた尻たぶが割れ、その狭間に開いた穴から盛りあがった無毛の秘部が白さを強調する。

「すごい……。こんなのって、エッチすぎるよ……」

薫が下から突き立っている淫茎をつかんで自分の秘部にあてがい、まさぐるように動かしながら柔肉の狭間に押し当てた。

「あぁっ……!!」

柔肉が左右にめくれ、奥から溢れた濃い淫液が淫茎にしたたる。

「どうした、穴は間違ってるぞ」

「うん……分かってる、分かってるんだけど、ちょっと……。お願い、もうちょっとだけ、こうさせて……」

薫が握った淫茎を前後左右に揺さぶり、亀頭の先端を膣口にこすりつける。

「あぁあつ、気持ちいい……感じちゃう……」

半開きになった唇から堪らない風情の溜め息が溢れ、瞳が焦点を失くした。

亀頭をクチュクチュと音をたててこすっている薫の、濃い淫液にぬめった秘肉の味わいと、鏡に写し出されている彼女の姿――

欲望を押し切れなくなった平尾が、薫の括れた腰をつかんで、力一杯に押し下げた。

「あぐうんっ……!!」

深く一気に貫かれ、薫が顔をのけぞらせる。

「動け、腰を振れ！ 尻を振るんだっ！」

平尾が振りあげた手を、自分の太股の上で歪んでいる薫の尻に叩きつけた。

「ああんっ、叩かないで、叩いちややだよお……！」

だが、そう言いながらも彼女は膝を立て、腰を持ちあげ、再び下ろし、秘部に捉えた男の肉塊を貪りはじめる。

「ああつ、あんっ、うっ！ あああああんっ！」

たどたどしい動きで上下している尻たぶを、平尾が再び打ち据える。

「そうだ、もつとだ、もつと動け！」

淫茎に巻きつき、ぐいぐいと絞めあげてくる、まだ狭くキツめの膣穴の快感を味わいながら、平尾が命じた。

「はい……はい！ んっ、んっ、んっ、んっ！ ああつ、イイツ……！」

応じた薫が体をわずかに前に倒し、秘部の上端を淫茎に押しつけ、こすりたててくる。

「ここ、ここがイイの、ああつ……固いの、とつても固い。ゴリゴリしてる、先生の、とつてもゴリゴリつてこすれてる」

平尾が両手を薫の胸にまわして乳房をつかんだ。

やわやわと揉みこんで、手の中に溢れる肉の柔らかさを楽しみ、網目からツンと突き立っている乳首をつまむ。

「うわっん！ うっ、くうんっ……！」

小粒なグミキャンディに似た感触の尖りをこねまわすと、薫が子犬の鳴き声のような喘ぎを漏らし、体をクネクネとよじりはじめた。

膣穴の絞めつけが強くなり、下がってきた子宮の丸くコリコリとした入口が亀頭にぶつかる。

「うぐっ、ぐっ、あぐんっ……！ だめ……ああつ、ダメッ、あぐっ！ い、いっちやいそう、もう、イツちやうよっ……！」

「なんだ、もうかよ。我慢のできないやつだな」

「だって……だってっ、当たってるんだもん、お腹の中に……ああつ、か、固いのが当たってるんだもんっ……！」

「仕方ない奴だ」

平尾がつまんだ乳首をひねり潰し、乳房から離れた手で薫の背中を強く突いた。

「ひいっー！」

薫がベッドにうつ伏せに倒れ、その拍子に淫茎がズルリと抜け出す。

「ああんっ、イヤッ！ 抜けちゃった、早く、先生、早くっ！」

腰を振り、黒い網目に包まれたピップを突き出して、薫が平尾を誘う。

「こんなにベトベトにしちまいやがって」

平尾が目の前の尻を驚つかみにする。その狭間では、白濁した愛液に濡れそぼった秘部が、赤黒く欲情に色付いている膣口を剥き出しにしている。

淫茎を押し当て、再び一気に貫く。

「ああんっ！ う、うれしい！」

絶叫した薫が尻を揺すりたててくる。

「ぐっ、ぐっ、うぐんっ！ ああっ、イ、いくっ、イク、イクウ！ ダメ、もうダメッ」

薫の秘部が、絶頂直前の痙攣に引き攣って、食い千切られかと思うほどの強さで食い絞めてくる。細かな襞が刻まれた膣壁が淫茎をしごきあげ、ぶつかってくる子宮が亀頭の先をこする。

平尾が力をこめて腰を振り、奥底を突きあげた。

「ひいっ！ い、イクッ！」

絶頂の声を振り絞った薫の背中が反り返る。

平尾が最後のトドメを打ちこむ。

下腹から淫茎を貫いて弾け飛んだ射精の快感が、口から太いうめきとなってほとばしった。

「うふふっ……。まだちよつとビクビクしてる……」

ようやく荒い息が収まると、薫がベッドに仰向けになっている平尾の下腹に顔を寄せてきた。

「ねえ、先生も気持ち良かった？」

「ああ……」

射精の後の気だるさの中で、平尾が素っ気なく応じる。

薫の体に対する欲望が収まってしまうと、彼の頭には再び、昼間の事件のことが蘇ってきていた。

「そうだよね、こんなにいっぱい零れちゃってるもんね」

そんな平尾の様子にも気付かず、薫が汚れた淫茎に手を添えて、溢れた精液を舐め清めはじめた。

下腹から伝わってくる薫の舌の動きを感じて、平尾が顔を起した。

「薫、今日の四時限目はどうだった？」

「えっ？ どうって……。四時限目って体育だったけど……」

急に訊かれたことの意味が分からず、薫が不思議そうな声で答えた。

「体育か、そうか……」体育なら、生徒がわざわざあの階のトイレまで来るはずないか。

「どうかしたの？」

「いや、別になんでもない。ほら、ちゃんと綺麗にするんだぞ」

「うん……」

再び舌を伸ばそうとした時、薫が顔をあげた。

「そうそう体育って言えばさ、ふふっ……麻美ったらさ、おかしいんだよ」

「麻美……？ ああ、美樹崎か、どうかしたのか」

悪戯っぽい笑みを浮かべた薫が、白いヌメリをぺろり舌先で拭い取る。

「あのさ、体育の時に急に生理が来ちゃったみたいでさ、慌てて手当しに行っちゃったんだ、男子も見てたから凄く恥ずかしそうでさ、わたし、笑っちゃった」

生理……！

そう言えば、あのトイレで見た小さなバックは、よく女生徒が生理用品を入れて持ち歩くポーチのようだった……。

それに、そのポーチを教室に取りに来たなら、美樹崎があトイレに居たとしても不思議ではないが……。

「あれ？ 先生、どうかしたの」

「ん？ 何でもないって言ってるだろう」

「だって、何だか怖い顔してるしさ……」

「うるさいな。ほら、早く元気にしてみせな。それとも、今日はさっきので終わりでもいいのか？」

「えっ。う、うん。ごめんなさい、ちゃんとするから、そんなこと言わないで」

薫が唇を開き、汚れた淫茎を深く啜えこんできた。

【3】

「ええ、美樹崎 麻美なら知っているわ、貴方のクラスのショートカットにした子でしょう？」

平尾の話をひとしきり聞いた後、美佐子が言った。

昼休みの保健室には二人の他には誰も居らず、白衣姿で机に座っている美佐子の前に置かれた診察用の椅子に、平尾が腰を下ろしている。

「ああ、そうだけど、あまり目立つような生徒でもないのによく知ってたな」

平尾の記憶にある麻美は、性格も大人しく、成績もそう際立った所のない、多数の女生徒の中の一人でしかなかった。

「うふふっ……。だってあの子とっても可愛いもの。性格があんなだから今はまだ男子生徒に人気がないけど、後二、三年もしてごらんなさい」

美佐子が意味ありげな微笑みを浮べる。平尾はそこに淫らな匂いを嗅ぎ取った。

「へえ、女から見るとそうなのか」

「あら、貴方らしくないわね、もう少し女を見る目があると思っただけだな。もしかして他の誰かに気を取られたりしてて」

「ああ、その通りだ。お前にな」

「うふふっ……。またそんなこと言っちゃって。で、どの程度確かなの、その話？」

「どうだろうな、朝の内にあのトイレがある階のクラスの教師にちよっと訊いたんだが、あの時間教室を出た生徒は居なかったよ」

「じゃあ、確率は高いかもね」

「ああ、多分な。だが、事が事だけにミスったらマズいからな。今日の放課後、確かめてみるつもりだ」

「でも気をつけてよね、変なゴタゴタは嫌よ」

「なに言ってるんだ、好奇心いっぱいの子頃の生徒の中に俺たちのことを知ってる奴がいるんだ。ほっといてみる、必ずいつか噂になるぞ」

「そうよね……。でも、もしあの生徒が麻美だったら、どうするつもりなの？」

「そりゃ、決まってるだろう。その時は、お前にも手伝ってもらわなくっちゃな」

平尾が薄く笑う。その冷笑は、先ほど美佐子が浮かべたものと同じ種類のものだった。

*

腰が鈍く痛んでいた。

いや、腰だけではなかった、下半身全体に何かを乗せられているような不快感がわだかまっております、それが麻美の沈んだ気分を助長していた。

バレてないよね。昨日あのトイレでポーチ落としちゃったけど、平尾先生も看護婦さんも気付いてなかったもの……。

だけど、先生の顔見たら、わたし、平気でいられるかな。顔とか赤くなっちゃって、先生に変わったと思われたりしたら……。

今日、何度目になるだろう、クラスの自分の席に座って外のグラウンドにぼんやりと目を向けながら、麻美が小さく溜め息を漏らした。

「麻美、今朝からずっとそんな顔してるじゃない、本当に大丈夫なの？」

そんな彼女に、隣の席に座った薫が話しかけてきた。

心配そうな表情を取りつくろってはいるが、浮かれた気分が声に出ている。もうすぐはじまる今日最後の授業は、彼女のお気に入りの先生、平尾の物理なのだ。

薫ったら、今まで何も言っただけなのに……。

麻美の迷惑そうな顔にも気付かず、薫が話しを続ける。

「でもさ、麻美っていつもそんなに重かったっけ？」

「えっ……？」

生理の初日の、ただでさえ体調が不安定になりやすい時に、昨夜ベッドの中で何度もくり返し

てしまったオナニーの記憶が蘇り、頬が赤くなっていくのが自分でも分かる。

「う、うん……何か今度のは特別みたいなんだ……」

「そうなんだ——」

装っていた心配げな表情の下で、薫の瞳がきらめく。

「——じゃあさ、そんなに気分が悪いんだったら、わたしが平尾先生に話してきてあげようか
「えっ！」

薫の言葉に、麻美が思わず顔をあげた。

「ダメ！ それはやめて！」

「どうしちゃったの、そんな大きな声出して、びっくりするじゃない」

「あつ、ごめん……。でも本当に平気だから、先生には……」

「そう、せっかく心配してあげてるのに、麻美がそう言うならいいよ」

「ごめんなさい……」

「もういいよ」

平尾に逢うチャンスが潰されたとも思っただろう、薫が冷たい声で言い放ち、席を離れていった。

*

授業開始を告げるチャイムが鳴った。

平尾が教室に入っていくと、普段なら少し遅れてくる彼が早く来たことに驚き、数人の男子生徒が慌てて自分の席に戻った。

そんな生徒たちに一瞥をくれ、平尾が教卓につく。

いつものように、席から秘密めかした笑みを向けてきた薫を無視して、教室の中を見渡す。

麻美はすぐに見つかった。気分でも悪いのか、どこか青い顔をしてうつむいている。

生理だったのは本当みたいだな。

平尾が教科書を用意するフリをしながら、麻美をじっくりと観察しはじめる。

美佐子の言う通りだ、なかなかの女じゃないか。こんな女を見逃してたとはな。まあ、このクラスを受け持つようになってからは、薫のことがあって、他の女生徒にかまってる暇が無かったからな。

麻美から視線を外して教科書を広げ、前回の授業で進んだところをチェックする。

「じゃあ今日は、この前の復習からはじめようか」

黒板に向かい、チョークで演習問題を書いてから、再び生徒たちに向き直る。

「そうだな、じゃあ——」

思いついたような素振りです。麻美に目をとめる。

「——じゃあ、美樹崎」

「は、はい！」

急に名指しされたことによほど驚いたのか、麻美はビクンと体を震わせて顔をあげた。

「前に出てきて、この問題をやってくれないか」

「えっ、は、はい……」

「ん？ どうかしたのか、あまり顔色がよくないみたいだが、気分でも悪いのか？」

「い、いえ、別に何でもありません……」

「そうか、じゃあ早く出てきてくれ」

「はい……」

席から立って黒板の前にやってきた麻美を、平尾は再び観察する。

ヤボな制服なんて着てるから分かりにくかったが、体もなかなかのもんじゃないか。こりや、結構楽しいことになってきたぜ。

「あ、あの……先生」

チョークを持っている手をとめて、麻美が振り向いてきた。

「何だ？」

「あの……ちょっと席に戻って、ノートを見てきてもいいでしょうか？」

「どうしたんだ、この前教えたエネルギー保存則の公式の応用だろ、憶えてないのか」

「すみません……」

「仕方ないやつだな。それとも、やっぱりどこか悪いのか？」

平尾が下腹に視線を向けると、スカートの下で麻美が思わず脚を窄めた。

「い、いえ、どこも……」

「そうか、じゃあ、家で復習もしないでサボってたってことだな」

「そんな……」

「何だ、違うとでも言いたいのか？」

「いえ……。すみません……」

「分かった、もういい。席に戻りなさい」

「はい、すみませんでした……」

うなだれて席に戻っていく麻美の後ろ姿を見て、平尾は冷笑を押し殺した。

*

その後の授業は、普段と変わりなく進行した。

自分の席に戻ってからも暫くは、麻美は授業に集中できなかった。級友たちの前で恥をかいってしまったことも当然その理由の一つだが、それよりも、普段は生徒を前に呼び出して演習問題などやらせたことなどなかった平尾が、今日に限って、しかも自分に対してそれを行ったことが気にかかっていた。

「虐められたみたい……。」

それに、先生ったら二度も体調のことを訊いてきたし。でも、わたしが生理だって、分かるはずないものね。

考え過ぎだよ。そうだよ、先生と看護婦さんのあんなことを知っちゃったから、わたし、変に意識しちやってるだけなんだ。

何度も自分に言い聞かし、麻美は授業に集中しようとする。

そして、それが何とか成功した頃には、既に授業も終わりの時間に近づいていた。

「じゃあ、今日はここまでにしておくか」

腕時計にチラリと目をやって、平尾が教科書を閉じた。

今日最後の授業が終わった教室は途端にザワつきだし、平尾が教卓を離れるか離れないかの内に数人の気の早い生徒が帰り支度をはじめ。

そんな教室の中で、麻美もまた教科書を片づけながら、ほっと溜め息をついた。

これで帰れるんだ、早く家に帰ってシャワーでも浴びたいな。

股間では、午前中に一度交換したナプキンが既に不快感を訴えている。

席から立ちあがり、他の生徒たちに混じって教室のドアに向かう。廊下に出たその時だった。

「美樹崎」

えっ？

呼びかけてきたのは平尾だった。振り返って見た時、彼が向けている目に体がゾクリと震えた。

「いったい今日はどうしたんだ？ 授業に全然集中できてなかったじゃないか」

「は、はい……」

どうして？ どうして先生がまだ廊下に居るの……。

「それに、最初の時にも、あんな簡単な問題も解けなかったしな。いつもの美樹崎らしくないじゃないか」

「……………」

もしかして、先生、わたしを待ち伏せしてたんじゃないか……。

「黙ってたら分からないだろう」

「あっ、す、すみません……」

「仕方ないな。よし、少しカウンセリングルームで話そうか」

「えっ、先生、わたし本当に何でもなくて……」

「おいおい、美樹崎、何をそんなに恐がってるんだ、何でもなければ脅えることはないだろう」
麻美の肩に平尾が手を乗せ、強く握り締めてきた。

平尾に連れられてカウンセリングルームに向かう麻美の心には、様々な思いが渦巻いていた。
自分はこれからどうなってしまうのかと言った恐れと、あの時トイレに居たことを、平尾に感
付かれてしまったんじゃないのかと言った不安――

だけど、まわりの、友だちと連れ立って帰宅を急ぐ生徒や、クラブ活動に精を出す運動部員た
ちといった、いたって普通の校内の様子を見ると、そんな思いもまるで現実のことではない
かのようにも思えてくるのだ。

グラウンドを横切り、カウンセリングルームのある校舎に入る。階段を昇って、放課後のひと
けの少ない階にやってくる。

「どうした、入らないのか」

ドアの前に立った時、後ろから平尾が言った。

「――それとも、あんまり生理が重くて脚がすくんでしまったのかな」

「ええっ？」

どうして！ どうして先生がわたしの生理のことを知ってるの？

「驚いたみたいだな。聞いたんだよ、君が昨日の体育の時間中にトイレに手当しに行ったことを
ね」

「で、でも、いったい、いったい誰から！」

「ほう、随分と慌ててるじゃないか。どうしてだ、別に悪いことをした訳でもないのに、どうし
てそんなに慌ててるのかな？」

知ってたんだ、最初から知ってたんだ！ 先生は知ってたんだ！

思わず体をひるがえして逃げようとした時、平尾がドアに手を行く手を遮った。

「どこに行くつもりだ、まだ話しは済んじゃいないぞ」

「わ、わたし、先生、わたし！」

混乱する麻美が平尾を見あげる。ニヤリと笑いを向けてきた彼が、カウンセリングルームのド
アを開け、部屋の中に向けて背中をどんと押した。

「あら、美樹崎さんじゃないの、泣きそうな顔してどうしたのかしら？」

「……………」

部屋に押しこまれた麻美が、二度目の驚きに絶句した。からかいの口調で話しかけてきたのは、
中に居た看護婦の美佐子だった。

恐怖と絶望が麻美を支配する。

「ち、違っつ、違います！ わたしじゃない、わたしじゃないんです、あの時トイレに居たのは、わたしじゃ……」

言葉の途中で麻美は我に返り、声が小声となって消えていく。

「決まりだな」

茫然と立ち尽くす麻美の後ろから、平尾が肩をつかんできた。驚きと脅えに心がはち切れそうになる。

「い……！」

息を深く吸い、唇が絶叫の形に開く。

彼女の前で美佐子が素早く行動した。白衣のポケットに手を突っこみ、畳んだガーゼを取り出す。

「ヤっ……」

絶叫が、唇に押し当てられたガーゼによってくぐもった悲鳴に変わり、同時にツンとした刺激臭が鼻から頭に染み透ってきた。

な、なに？ これってなに？ まさか、まさか先生がこんなこと……。

意識が消滅していくまでの短い間、麻美はカーテンに覆われた窓を見つめ、その向こうにいるはずの帰宅途中の友人や、クラブ活動中の生徒のことを思う。

助けて……。お願い、誰かわたしに気付いて……。

闇が麻美を飲みこんだ。

以下、次回へ